

# 評 論

## 山武市指定文化財(史跡) 鈴木荘内(養察)の墓(姫島)

鈴木養察は、農民でありながら、崎門学派の稲葉迂齋の下で朱子学を学び、桜木闇齋(東金)、安井武兵衛(成東)、安井北斎(小松)、布留川彌右衛門(片貝)、平山安左衛門(早船)、鈴木兵右衛門(折戸)、鵜沢近義(清名幸谷)とともに上総八子の一人です。地元姫島に戻った後は「姫島学舎」の塾を開きました。



鈴木荘内(養察)の墓

## 『東海道今昔旅日記―お姫さま江戸へ』

成東 高浦なみ子

「佐倉のご出身だったら是非読んでみて、図書館にあると思うから。」

二〇年近く前、千葉市の文書館で知り合った方からそう勧められたのが、福島和夫著『東海道今昔旅日記―お姫さま江戸へ』だった。

しかし、刊行から数十年経った本書は近隣の図書館には所蔵がなく、読む機会に恵まれないでいた。それが昨年暮れ、ネットの古書店巡りで偶然にもヒットしたのだ。小躍りして早速入手、正月は久しぶりに本の虫の匂いを嗅ぎながら、読書三昧の幸せな一週間を過ごした。

当時の島根新聞社社長が本書に序文を寄せている。

「本書は、松江松平藩九代の藩主<sup>みかりたけ</sup>齊貴公の姫君の政姫という五歳の幼女が、下総佐倉の藩主堀田侯の世子との婚約に先だつて、松江から江戸までの道中の日々を、二人の御守役が交代で記録した日記『政姫様御道中日記』を原本にして、時候も、日程もそれとおなじスケジュールで全行程をたどったところに特色がある。(中略)

著者は物情騒然たる当時の世相を随所に活写して、一見のどかにみえる道中記の背景としているが、このあた

りにも、いたいけな幼女政姫様に対する著者の感慨の深さをくみとることができる」

安政五年(一八五八)四月五日、出雲(島根県)松江藩主松平齊貴の次女政姫は、江戸へ向けて松江城三の丸南御門を出立した。数え年五歳のお姫様は、緋縮緬御裾模様の御振袖という盛装で、御庭から御門外まで詰めかけたお付きの人々に見送られ、夜来の雨が降り続く中旅立ったという。

『政姫様御道中日記』には、まず道中の御供の名が記されている。御守役二人の他、供廻り四人、医師四人、御徒・料理人・元詰等六人、奥女中九人、総勢二五人の体制であった。

この旅の目的は、かねてより話が進められていた政姫の婚約を正式に決定するためであった。婚約の相手は、下総(千葉県)佐倉藩主堀田正睦<sup>まさよし</sup>の嫡男<sup>こうの</sup>鴻之丞<sup>のじょう</sup>で、政姫より三歳年長の八歳だった。

旅の初日、松江城を午前八時に出立した一行は、宍道湖と大橋川でつながる中海のほとりの御茶屋で早目の昼食を済ませた。ここで、政姫の乳母を勤めた者がお見送りのため参上したので、昼食を下されたと記されている。

安来の雲樹寺、清水寺は藩侯も度々参拝される大寺で

あり、政姫もこの度の江戸下りにあたっての参拝は必須であったろう。

午後四時過ぎに雲樹寺に到着、続いて清水寺に参拝を済ませた政姫一行が、ようやく初日の宿、安来の御茶屋に到着したのは午後九時を過ぎていたという。

政姫は疲れて眠ってしまったので、御膳は差し上げなかつた、と日記に記されている。

一行は、翌日国境を越えて伯耆の国（鳥取県）に入り、二部、新庄、久世、勝間田と泊りを重ねながら、急峻な中国山地を越えて行つた。

松江の姫君の御道中とあつて、一行の立寄り先に土地の有力者等からの献上品が届けられることが多かつたようで、これを憂えた御守役が、「宿泊、休憩の折の献上品は一切断るように。それでも押して献上する者があれば、相談したうえで取り計らうように」という指示を出している。

それというのも、献上とはいへ貰いっぱなしという訳にはいかず、相応の謝礼が必要であり、三〇日もの長旅となれば、その謝礼金だけでも相当に頭の痛い出費であつたに違いない。

実際、当時の諸物価の高騰は特に激しく、大名家といえども厳しく経費の節約を迫られていたであろう。

松江―江戸の参勤道中は、およそ二二里（約八四八km）を二〇日間程で踏破していたようだ。それがこの度の政姫の道中では三〇日間を掛けている。五歳の幼女を守つての女性の多い一行であるから、余裕のある日程を組んだとも言えるが、政姫が狭い駕籠に飽き飽きしてむずかることもあつたであろうし、そんな姫様のご機嫌を取り結びながら、それでも一日三〇km近くは歩き通すのである。御供の面々の気苦労が偲ばれる。

政姫が駕籠を降りて「御拾い遊ばされ（お歩きになつた）」という記述が日記に頻出するようになるのは、旅立つて四、五日目くらいからで、少しずつ旅にも慣れ、駕籠の内から眺める庶民の生活や里の風景に子供らしい興味を抱き始めたのかも知れない。

松江を発つて八日目に一行は姫路に到着。姫路を出れば、明石、須磨の景勝地が続く。政姫一行は、淡路島を指呼の間に望む舞子の浜で、野点を楽しんでいる。

政姫の曾祖父は、茶人としても名高い松平不昧公である。不昧流の茶事はごく自然に身につけていたのだろう。緊張の山越えから山陽道に入り、大勢の藩士が詰める大坂の蔵屋敷も間近となつて、御供一同、ほつと一安心の笑みもこぼれたのではないだろうか。

忙しい日程をやりくりしての京都の社寺詣で、大雨の

箱根越え、深夜に及んだ江の島巡遊等々、政姫にとっては忘れがたい思い出になったことだろう。

一行は、予定通り五月五日夕刻、江戸赤坂御門内の松江藩上屋敷に無事到着した。

この日は、紹の緋色御振袖を召されたという。

参考・引用資料

『東海道今昔旅日記―お姫さま江戸へ』

福島 和夫

『松江歴史散歩』

乾 隆明

『佐倉のおんな二四人』

松裏 善亮

### 【その後】

安政六年四月、政姫は堀田鴻之丞（正倫まさとも）と婚約した。

この年、正倫の父堀田正睦が隠居したため、正倫が九歳で家督を継ぎ佐倉藩主となった。

文久三年（一八六三）三月、政姫、堀田家の上屋敷へ入る。

慶応三年（一八六七）政姫一四歳、正倫一七歳で結婚した。

正倫との間に女兒が生まれたが夭折した。

明治一五年（一八八二）九月、政姫、二九歳で死去。

茶道、書、和歌、俳句等に堪能で、「玉映」の号を持つ。

### 【墓所】

佐倉市新町 甚大寺（堀田家の菩提寺）

## 郷土・山武の源流（玉の浦）を辿る

成東 金田 弘之

仏画・石仏 七世紀後半（六五〇頃）に造営された板付・駄ノ塚西方墳の玄室に、被葬者が西に向き合う位置関係（西壁）に『線刻画』が描かれている。また、真行寺方墳（六八〇頃）中段の『石造』は西方（極楽浄土）を向いて据えられている。

『線刻画』と『石造』の顔の部分と比較してみると、顔は共に丸く頭頂部に突起があり両耳はふっくらとし、僧侶が帽子を被っているようにみえる。両者は類似しており、仏の姿（仏像）を現わした『仏像図』『石仏』と呼称すべきものと考ええる。

古墳時代（墳墓）は、道教の流れをくむ神道祭祀（天神地祇）が執り行われていたが、郷土の終末古墳（六五〇〜）には神道と仏教が混在していたように見える。

造成時期が近接した方墳の『仏像図』と『石仏』は同一人物が作成したようにも見える。背景には一体なことがあったのであろうか。

神仏習合 蘇我臣が物部氏を滅ぼして仏教が受け入れられるようになるのと神仏習合（混交）の時代へと移行していった（五八七〜）。

県史は「武射臣は東のシトリベの一員」と論評するが、シトリベとは「蘇我臣が東国豪族の子弟を身辺警護にした従者」を指す。

蘇我臣の身辺を警護するために派遣された武射臣やインベ氏の子弟は、蘇我臣の墳墓（方墳）や仏教信仰（仏像）を目の当たりにし、帰国後、神・仏を信仰する墳墓を造営したのであろう。

武射の神仏習合・墳墓は蘇我臣が滅ぼされた（六四五）のちに造営されたとみられるが、中央（大和）では神仏習合が定着し、武射臣との緊密な関係が保たれていたことが伺われる。

郡衙建設 大化の改新（六四五）を経て国造制（地方主体の統治）が終焉を迎え律令制（中央中心の統治）へと移行するが、大和政権は国を直接統治する制度や仕組みを定めた『大宝律令』を制定（七〇一）して国造制度を廃止した。

『大宝律令』制定に相前後して、武射郡では郡衙（役所）・郡寺の建設が行われた（七世紀終末〜八世紀末）。

平成三年に嶋戸東遺跡の発掘調査が行われ、一辺が五〇〇mに及ぶ全国でもトップクラスの大規模郡衙であることが判明した。

郡衙の内部には、政庁・正倉（倉庫）・館（住居）・

厨（厨房）・僧司（僧侶の控え所）などの建物があつたとみられる。

真行寺に『御座船』とする屋号があり仏像を据えた船が漂着した（辿り着いた）と伝えるが、郡衙の南東部からは『武射寺』と墨書された土器（Ⅲ）が発掘されており郡寺の存在が確認できるといふ。

郡衙・郡寺の規模から推定すれば、大和政権による東国経営の拠点として重要な役割を担っていたとみられる。蝦夷政略 嶋戸・真行寺と津辺の間に境川が流れているが、津辺は「津の辺り」の意味で港が存在していた（八世紀）。

『御座船』伝承は港の存在を明らかにし、境川を中心にした水路が玉ノ浦を経て外海（太平洋）に繋がっていたのである。

かつて（五八一）蝦夷を征討した実績をもつ武射郡は、この頃（七〇〇）も依然として蝦夷攻略の前進基地になつていたとみられる。

続日本紀（七六九・神護景雲三年）は、「陸奥国・牡鹿郡の人・春日部奥麻呂ら三人が武射臣の氏姓を賜つた」と記している。

栗田氏（元千葉県文化財センター主任研究員）は、「春日部奥麻呂はもともと上総国・武射の有力者で海を渡つ

て牡鹿郡に移住。そこで大きな勢力を有し、故郷である『武射』の氏姓を賜つたことが考えられる…」と述べている。

春日部奥麻呂らは、蝦夷征討時（五八一）に、郷土（武射国）から牡鹿郡に移り住んだ春日部氏の後裔（子孫）とみられる。

地勢的に、牡鹿郡は蝦夷の攻撃に対して護りやすい半島部にあり、しかも北上川・河口付近には港の存在が認められる。北上川を遡上して蝦夷を攻撃しやすい地域にあつた。

大和政権は、神亀元年（七二四）に多賀城を建設、さらに天平一一年（七三九）北上川上流に牡鹿柵（砦）を、天平宝字三年（七五九）桃生柵を建設した。神護景雲三年（七六九）に入ると、陸奥国（桃生・伊治城）に移住する民衆を坂東（関東）から募っている。

春日部氏は、六世紀後半から八世紀後半まで、太平洋側の蝦夷攻略ルート（武射く岩城く牡鹿）を堅持し、東国兵や物資（食料や兵器）を輸送（受け入れ）する役割を担っていたのであろう。この功績により春日部奥麻呂ら三名は武射臣を賜つたとみられる（七六九）。

その後、大和と蝦夷の間で三八年戦争（七七四く八一）が行われたが、房総三国（安房・上総・下総）では、

民衆の動員や物資の供給が行われ、豪族たちが蝦夷へ出陣していったという。

前進基地のあった武射郡からも多くの人々が蝦夷（東北）へと出征していったとみられる。

阿弓流為の逆襲 県史によれば、「安倍墨縄は延暦八年（七八九）、蝦夷の族長・阿弓流為の本拠地を目指し、北上川を渡河・進軍を開始したが、蝦夷の反撃にあり、將軍・丈部善里ら二五人が戦死：一〇三六人が北上川で溺死する大敗北を喫した。：安倍墨縄は官位を剥奪された」と記す。

一方成東八幡神社記は、「桓武帝、延暦九年（七九〇）諸（人々）痘瘡を病む時、舞子を相馬に納む」と記すが、『痘瘡』・『相馬』のキーワードの背景には蝦夷攻略・敗北に関する重要な因果関係が認められる。

まず『丈部』姓について、一説には岩城の人とするが、一方で武射臣とは同族で、武射郡加茂郷（芝山）の墨書土器や正倉院文書の記録に山辺郡岡山郷（東金）の人にその名が見える。

律令制によって、武射国は武射郡と山辺郡に分割されたが、武射臣と同族の丈部氏が山辺郡司に就任していたとみられる。

將軍・丈部は武射郡または山辺郷の出身で、蝦夷攻略

作戦に出陣していた人物であろう。

なお丈部・岩城説は、太平洋・蝦夷攻略ルートの中継基地（岩城）であり、郷土から派遣されていた丈部氏がそのまま蝦夷攻略作戦に参戦していたことも考えられる。当時、岩城には造船施設があったという（常陸国風土記・鹿島郡条）。

そのように考えると、丈部氏のもとで、武射・山辺郡から出征した多くの兵も、北上川渡河作戦の際に戦死・負傷するなど大打撃を被っていたことになる。

成東八幡神社記（七九〇）は「諸痘瘡を病む」と記しているが、將軍・丈部善里が戦死して多くの兵が北上川で犠牲になった（七八九）翌年、武射郡で疫病（痘瘡）が蔓延していたことを物語っている。

アテルイの逆襲で一〇三六人が溺死した背景には、数千に及ぶ兵が負傷しそれが原因で疫病にかかった兵も少なからずいたであろう。

蝦夷地から帰還した傷病兵を看護したとみられる武射住民の多くが疫病に感染したことを示唆する。

また「舞子を相馬に納む（成東八幡神社記）」と記すが、相馬は鎮守府副將軍・安倍墨縄が統治した領域（猿島郡周辺）にあり、災い（戦死者霊や疫病）を鎮めるため舞子を納めたとみられる。

『続日本紀』は「この年（七九〇）京・畿内で天然痘流行」と記す。

大敗北を喫した武射臣は厳しい処分を受けたのであろう。その後、武射郡に関する記録はあまり見られなくなる。衰退 武射郡はおよそ二〇〇年（五八〇～七九〇）におよぶ期間、蝦夷攻略の前進基地として重要な役割を果たしてきたが、アテルイの逆襲で敗退しその役割を終了したように見える。

古墳時代後期（五〇〇）から形成されはじめた玉ノ浦・第三砂提群は奈良時代（七五〇）以降には陸地へと変貌しつつあった。

大岩桂子氏（房総古代学研究会）は「木戸川流域は六～七世紀に集落が営まれ八世紀以降急激に規模を縮小する：作田川（境川）流域では集落のピークは八世紀：」と述べる。海退現象により蝦夷攻略の中心が木戸川から作田・境川へシフトしたことが読み取れ得る。

郷土に残る「海水が引いてたちまち陸地が出現した」とする伝承は、早船付近の前面に広がる海峡（ラグーン）の陸地化を指している。

しかしながら海退現象はさらに継続。海峡（境・作田川）の狭隘化が進み、外洋（太平洋）との出入りがさらに困難となり、郡衙の機能が徐々に失われていったとみ

られる。

その後（七九〇～）、坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろが征夷大將軍として蝦夷を攻略することになるが、坂上田村麻呂の事績（伝承）は武射郡にはなく香取・匝瑳郡に分布している。県史は、「弘仁三年（八一二）物部匝瑳連足継ものべのすけつぐが鎮守副將軍から鎮守將軍に昇格」と記している。

奈良時代後半（七九〇）から平安時代の初めにかけて、香取海かとりのみ（下総国）が蝦夷攻略の前進基地として重要な役割を担う一方で、武射郡衙（上総国）がその機能と役割を喪失したことを示唆する。

インベ氏は五〇〇年間（三〇〇～八〇〇）に亘って郷土（武射）を開拓し、武射臣のもとで重要な役割を果たし、多くの伝統・文化・習俗を残したが衰退へ向かったとみられる。

都では齋部いんべのひろなり広成が、インベ氏の復権を実現するため『古語拾遺』を表し平城天皇へいせいに上奏したが復権は叶わなかった（八〇七）。

祭祀権（奉幣使ほうへいし）を剥奪されたインベ氏は衰退するが、武射郡（国）を支えてきたインベ氏も軌を一にして衰退したとみられ、武射郡衙の機能喪失と時期がほぼ一致している。

平安時代に入ると海退により玉ノ浦（郷土）に新たな

大地が出現し、平氏が活動する場へと変貌して行く。

参考文献

・ 『房総そして玉浦（武射）をつくった一族』

金田弘之 崙書房

・ 『蝦夷との戦いと房総三国』

千葉県の歴史 山川出版社

## 柳春玉訳『中国現代詩人文庫』

### 1～5に見る現代中国詩人の詩魂と表現

壇谷 大掛 史子

詩集『東京の表情』で詩界に颯爽と現れた柳春玉さんが『中国現代詩人文庫』として、まとめて五冊の中国現代詩人紹介の貴重なお仕事をされた。中国朝鮮族出身の五名の詩人たちの作品を五冊の文庫として一括出版した大変珍しく画期的な刊行だ。この五人の詩人たちは中国朝鮮族出身で、黒龍江省、延辺朝鮮族自治州、遼寧省（瀋陽）などの地域で活動し、そのテーマも表現も多彩で興味深い。

先ず文庫1『韓永男詩集』。著者は一九六七年生まれ、文芸著作多く、黒龍江省少数民族文学賞、尹東柱文学賞、民俗文学賞など受賞多数。

僕は揺られながら来るよ

僕は揺られながら来るよ

風が通り過ぎて揺られると　そこで揺られて

花として咲けと言うなら　咲くよ

僕は揺られながら来るよ

踊り狂った蝶がヒラヒラすると　そこで揺られて

笛の音で笑えと言うなら　笑うよ

夜明けの露が結ぶと　そこで揺られて

日差しで輝けというなら　輝けるよ

僕は揺られながら来るよ

揺られるだけ揺られて

もう行つていいよと言われたら　来るよ

来て　草の葉になって休むよ

軽快なリズムと「よ」で締める明るい詩行が読者を惹き込むと同時に生の不安定さを活写している。

文庫2『全京業詩集』の詩人は吉林市非物質文化遺産専門家委員会や社会科学専門家バンク（民族文化類）のメンバーである学者。李白文学賞など受賞作多数。

アムノクガン  
鴨緑江溪谷

鴨緑江に沿って登っていけば

鴨緑江溪谷がある

昔昔お母ちゃんお父ちゃんがいて

毎日お互いが育てなければならぬ立場のことで争つ

て

後には西王母と

玉皇大帝の助けを

求めたのに

玉皇大帝が西王母の

かんざしを借りて

すーっと分け与えたのが

鴨緑江溪谷になったという

私が鴨緑江溪谷に行った日

溪谷を背にした

目の前に見えるのは

はつきりしない

影だけだった

一歩も

踏み出したり

しない

名所、旧跡などを痛快に詩い、さながら広大な中国の観光案内詩の趣き。著者は文化大革命や改革開放を体験し、門の中だけで遊ぶ日々を過ごし、その間外国ではベールリンの壁が崩れ、旧ソ連が崩壊し、アフガン、イラク、

リビアの銃声を聞き、コンボの硝煙を見、いままたウクライナの廢墟を見ている。激動の時代を表現者として生き抜いてきた証しの一集が本書であるとも言える。

文庫3 『金学泉詩集』の詩人は、中国延辺作家協会的主席を歴任、中国少数民族文学賞、韓国漢民族文学の広場文学賞ほか受賞。

### 中原での邂逅

楚と漢が天下を争った棋盤の

中原のとある一角で

雄大な楚河と漢界を闊にして

私たちは約束もなく会う

あなたは対岸に立っているが

風になびく 長い髪の中から

次第に滎陽の多くの物語があらわれ

歴史のある一つの愛を伝えてくれる／

李商隱リシヤンヤンのあまりにも多くの才能を受け継ぎ

劉禹錫リュウウキョウの千古に伝わる詩句を体得したが

静やかな瞳には唐宋の 穏やかな趣が漂い

伝統と現代が融合した經典的な美しさが輝く

私は黙したままひたすらあなたを見守り

昔の純真さが九月の空のように様変わりし

自由自在に

真珠のように玲瓏な雨粒をばらまくのだと考えてみる

澄んだレンズは徐々に焦点を合わせ

景色を深い背景にして遠くの滄海桑田を描き

にっこりと笑う一瞬に

心臓が激しく鼓動する場面を胸に深く刻み込む

(\* 1～5までの註は略)

この詩では壮麗な歴史の舞台を背景に大国の文化の歩みを格調高く伝える。

文庫4 『金昌永詩集』は、なんと「西塔」と言う詩100篇で埋め尽くされている。訳者柳春玉さんの詩集『東京の表情』も78篇すべてが「東京の〴〵」というタイトルが新鮮だったが、柳さんはもしかしたらこの金昌永さんの「西塔」の影響を受けているのではないかと思われる。本書の佐川亜紀氏の解説では「西塔」は中国瀋陽市の延寿寺のことで、西塔街は朝鮮族居住地であり、九二年の中韓国交樹立で大韓民国のビジネスマンや留学生が多く

入り一大コリアンタウンとなったという。

西塔3―梁世奉\* 將軍の銅像に付す

切られた一生が

過ぎ去った歴史を物語る

目まぐるしく馬蹄の音に

奪われた畑 失われた山が

肩を上下に揺らしてすすり泣く

暗闇の中で曙光を探してさまよった

不屈の魂は松の木で青々としている

止まった時間の中に

切られた一生が

今日を起こす

\* 韓国の独立運動家

日本の植民地支配で奪われた田や畑も書かれたこの詩の中で、独立運動家として朝鮮革命軍の総司令官となったが暗殺された梁世奉將軍を称えている。

文庫5 『趙光明詩集』は佐々木久春氏が賛辞を寄せ、「読者は覚醒と夢幻の境界を歩ませられる」と述べ、柳さんの訳に關しても「日本的〴〵 喩〴〵 を把握、抽象、具象行き届いた表現」と絶賛している。著者は記者、編集者、

フリーのライター、尹東柱文学賞ほか。

### 渇き

無色の水は流れ

無色の界へ行くのか

無光の星は輝いて

無光を照らし

ちよつと行って来たよ

まだ 空の墓だね

命の窪みを一生懸命掘ったのか

星のような命が流れていたよ

無色の汗が

私の色で

しばらく星のように泳ぎ

行ってきたね

のどが渇く

無水の水は 私を潤してくれるのか

禅の世界に導かれるような、この象徴的表現はまさに

中国現代詩の先端を行く創作姿勢とも言えよう。

以上五冊まとめて出刊された中国朝鮮族詩人たちの創作世界を寸見してきた。柳春玉さんという中国語、朝鮮語、日本語の表現を自在にこなす才によってもたらされた貴重な現代詩の精華といえよう。

なお、解説や訳には金海鷹、荒川洋治、金永洙、金京業、川中子義勝、張春植、佐川亜紀、金龍雲、佐々木久春の諸氏も携わっている。

(土曜美術社出版販売刊)

## 九十九里地域の落花生とサツマイモの栽培

富田 大高 栄一

旧成東町には落花生の先覚者牧野萬右衛門がおり、九十九里町にはサツマイモの先覚者上総代官赤松親子の活躍が、郷土史研究者によって紹介されている。偉人として高く評価されているものの、時代的背景を理解していないと、過少評価され兼ねない程の事柄が多々あり、通念上は前例無き事聞き入れ難しと却下され、門前払いの運命にさらされていた。

その為に先覚者達は多くの難関を克服し、私財を投入したにもかかわらず、落花生もサツマイモも地元では名産地に成り得なかつた訳を農家に問うと、「百姓から言わせれば、常識的な事ですよ」と教えて下さったので紹介していく。

明治九年、二九歳の萬右衛門は、落花生が現金収入に貢献出来ると確信するや、横浜の中国商館へと種を購入する為に勇んで出立した。

やっと捜しあてたものの、種は無く神奈川県三浦郡中里村で試作しているという情報を与えられると、二日かけて探しあてやっとの思いで二升五合を購入する事が出来たのだ。

足どりも軽やかに郷里に帰ると、さっそく有志達と共に普及をめざし、その第一歩を意気揚揚とスタートさせた。

初めて聞く人の中には、花を咲かせた後は子房柄しぼうへいが根のように伸び、地中に入ると実るといふのは、土葬を思わせる不吉な豆だといふらす嫌がらせの風評が広まるという弊害に屈する事なく、地域の指導者として農家の高収入を得る為の養蚕業導入等様々な副業に私財を投入して尽力する等その人徳と実績はゆるぎない地位を築いている。

明治二七年（一八九四）千葉県落花生改良組合を創設し会長に就任し、全国一の落花生王国に発展させていったのである。

地元草深地区が何故名産地となれなかつたのかといえ、落花生は連作を嫌う為、八街の広大な畑地に比べ、地元の畑は水田が入り組み面積が狭いという努力だけでは補えない大きなハンディがあった為である。

九十九里町にはサツマイモ栽培の先覚者として赤松代官親子が知られている。

サツマイモは米が不作でもよくとれた救荒作物として青木昆陽が、重農主義を実践していた八代將軍徳川吉宗に、信頼の厚い江戸南町奉行大岡越前守を通し、サツマ

イモが救荒作物として最適作物という文献の「蕃薯考」<sup>ばんしょこう</sup>を献上すると、さつそく一五〇〇個のサツマイモを取り寄せてくれた。研究を重ねていた所、九度以下では腐ってしまう事を知らなかったため五〇〇個を腐らせてしまった。研究に熱中している噂を聞きつけた儒学者新井白石がサツマイモは有毒である証拠に、朝鮮朝顔のような花が咲き、葉にも虫がつかぬと批評したのだ。確かに朝鮮朝顔の根や実是有毒であり、サツマイモは朝顔科であり、沖縄では八割、鹿児島では二割の花が咲くが、関東地方では、花の咲く前につるが枯れてしまう。その為昆陽は高名な白石説に圧倒されてしまい、越前守に助力を願い出た。さつそく幕府支配下の小石川葉草園と、奉行所領地である幕張の馬加村は青木昆陽が、九十九里の不動堂は幕府領である為、上総代官赤松源之進と息子典村の元へ白羽の矢が立てられたという訳である。

九十九里浜は行部岬から続く屏風浦と太東岬の双方が荒波に削り取られて海流に流され、年々九十九里平野を築きあげたため、日本一の砂浜である九十九里浜となったのである。

これ以上砂浜が波に削られるのを恐れ、波打ち際にテトラポットを設置したため、今度は九十九里浜が年々砂浜を減少させ海水浴場を失ってきている。そんな訳で片

貝漁港を造り漁船を砂浜から出入りさせる労力を省くための企画も漁師の大反対があったのは、風で運ばれる砂の量で川の流れが変わる現実があったのだが、現在は浚渫<sup>しゅんせつ</sup>船で対応されている。

そんな訳で九十九里町の畑は、砂地のヤセ地であり、ヤセ地でも良く育つサツマイモの試作地には好適地でもあった。

ところが一難去つて又一難の言葉通り、日本一の鯛漁に不漁が続くと、これまで魚肥に加工し、十五万石大名にも匹敵するという経済力を持ち、地方代官を兼ねる大網主が乗り込んで来た。「サツマイモの毒が流れ込んだ為、鯛が寄り付かなくなった」と言う訳である。不動堂の百姓達も、漁師と百姓の兼業農家である為、困り果ててしまった。やがて霜が降りるとこれまで勢い良く伸びていたツルが一夜で枯れてしまった。がっかりした赤松代官はイモズルを引き抜く事を命ずると、大きなサツマイモがゴロゴロ収穫出来、祝い酒をふるまい喜び合った。

一方下総台地で収穫されたサツマイモは、天明の大飢饉の際にも一人の餓死者を出す事もなかったため、地元民は馬加村に「昆陽先生甘藷試作の地」という立派な碑と、昆陽神社を建立し敬われている。

同じサツマイモ試作に成功させたというのに現在は赤

松代官自宅前に近年「甘藷栽培の碑」だけがひっそりと残されている。

それというのも先覚者の赤松代官が普及に努力したにもかかわらず、地曳き網の漁師稼業に従事しているだけの副業でも生活していったからである。田と畑が入り組んでいた為大規模に作る事もままならず、食べきれぬ程作っても、台地畑では井戸の様に深く掘り、地熱を利用し九度以上に保ち腐りを防いでいた。九十九里で真似することができなかつたのは、水脈が浅く、少し掘り下げただけで水が湧き出て、大きな貯蔵穴が掘れなかつたからである。

青木昆陽のサツマイモ普及の以前では、八丈島は鳥もかよぬ鳥流しの場所と恐れられた。伊豆諸島では唯一の水田五七町九反もあつたが、人口四七七二人と流人小屋には百五人が生活していたが、米が不作の年には、大勢の流人が餓死し毎日村内を巡り百姓や漁師の仕事を得られながら、その日暮しで貯えもなく政変に巻き込まれ身分の高い流人も多く、「おんじ(流人)の回り食い」と称される日課を重ねており、自給自足の肉体労働には耐えられなかつたからだ。八丈島では、本来なら半分は年貢米としてとりあげられる代り、高級な黄八丈六三〇反の納税が課せられていたのである。流人の餓死を防ぐた

め、「見届け物」として、金銭はもちろんならゆる生活品が届ける事を許されていた。

大高総本家でも高名な国学者平田篤胤ひらたあつたねの高弟として交流が深い所から、鹿島神宮の大宮司から、嫁をむかえていた。ところが大宮司の勤皇派支援が発覚したために、息子の鹿島則文が身代りに八丈送りとなっている。大高家は流人関係の役職にあつた上野寛永寺の宮様(皇族出身)の人脈により最高の扱いを受ける事が出来たため、身の廻りの品一六〇品目以上を五人分セットで送り続け、学問に必要な品や金品を見届け品として与える等、八丈島の文化発展の為に貢献し、他の流人もサツマイモで救われている。

則文は明治二年赦免されると、明治六年には鹿島神宮大宮司となり、明治一七年には伊勢神宮再建の為、これまで皇族だけに許されていた伊勢神宮大宮司職を民間人として初めて任命されている。

則文は在職一五年の間に、神宮養成学問所としての皇学館がくかん(大学)を設立し、明治一二年にはじまる日本最大の百科辞典「古事類苑」こじふいゑん五一冊を三五年かけ、文部省依頼から伊勢神宮の総力をあげて完成させており、この辺の図書館では大綱白里市しか閲覧出来ないが貴重な蔵書である。

則文が流人生活を送っていた八丈島では、男の子は黄八丈の高級な絹織物にはかかわれなかつた為、多くは間引きされ、母系社会であつた為女の子は織り子としての技は踏襲され、大奥の女性達に愛用されていった。

## 下布田出土の大型子持ち勾玉とヤマト王権

千葉市(元下布田) 田野 圭子

はじめに

「下布田は古い時代には特別な場所だったのではないか」そんな思いが山武市立さんぶの森図書館で『写真集 山武町の歴史』を手に取ったことから始まった。昭和の初期に山武市下布田で12cmという大型の子持ち勾玉が発見された。全国的にみても稀少な大きさのものであったが、現在は所在不明となり謎に包まれている。なぜ貴重な勾玉が下布田から出土したのか。それを検証していくと、奈良から東国に至る祭祀遺跡がヤマトタケル東征ルートに重なっていること、下布田に今も残る地名から、奈良のヤマト政権とのつながりが浮かんできた。この小論は、子持ち勾玉を手掛かりとして、ほのかに見えてきた奈良とわが郷里下布田とを結ぶ古代への随想を綴ったものである。

### 一、下布田から出土した子持ち勾玉

『写真集 山武町の歴史』の説明文は「下布田で発見された曲玉(古代の装身具で大きさは12cm)」(『鈴木長治コレクションより転載』)鈴木長治教諭は昭和四(一九二九)〜一九三七)年、八街農林学園(現千葉

黎明高校)に勤めていた。この時に下布田で発見されたと思われる。鈴木教諭の二五〇〇点ものコレクションは趣味の領域を超えていた。東北大学の伊東信雄名誉教授(明治四一・一九〇八年生まれ/専門は古代史)は図録にまとめるよう進言。志間泰治の協力により『鈴木長治コレクション―石器と土器』志間泰治編 昭和五一(一九七五)年七月二二日。刊行。

郷里岩手県水沢市周辺出土のものであるが、ほかに任地の移動にもなつて、歩いた千葉県、宮城県のものを含め、考古資料の一大コレクション、しかも、いずれも出土地が明らかである点が学術資料としての価値を大きくしている。12cmの子持ち勾玉が下布田で出土していたことは、地域にとつて非常に大きな歴史文化資源である。しかし残念ながら鈴木長治コレクションは、現在それらの行方が分からない。また『写真集 山武町の歴史』に掲載されたが、山武市史には掲載されていない。歴史の損失であると思われる。

### 二、奈良県香芝市・狐井稻荷古墳の子持ち勾玉

大型の子持ち勾玉の貴重さを知るうえでこの新聞記事がよく分かると思う。

『庭仕事に見つけた「子持ち勾玉」国内最大級だった』という見出しで朝日新聞、二〇二〇年十一月二五日、根

本冕 に狐井稻荷古墳の子持ち勾玉が掲載された。

奈良県香芝市の狐井稻荷古墳（推定五世紀後半）で国内最大級の子持ち勾玉まがたまが発見された。二〇二〇年八月に香芝市二上山博物館に寄託され、市教育委員会が十一月二五日に発表した。この子持ち勾玉は五世紀中ごろ～後半に製作されたとみられ、長さ13 cm、幅10 cm、厚さ5.5 cm、重さ565 g。大型の勾玉の本体（親勾玉）に、勾玉状の小さな突起物（子勾玉）が十個付属している。子持ち勾玉はこれまで約四五〇個が発見されている。古墳時代中期の五世紀から飛鳥時代の七世紀にかけて製作され、長さ10 cm、幅5～6 cm程度で縦長の形状が多い。祭祀具さいしに用いられたとみられる。市教育委員会の調べでは、今回の子持ち勾玉は長さ全国四位、幅が全国一位の大きさになるといふ。この子持ち勾玉は香芝市二上山博物館の企画展「葛城の大王墓と太古の祈り」で二〇二〇年に展示された。また市指定有形文化財に指定されている。これを見ると10 cm以上の子持ち勾玉がいかに貴重な品であるかが分かる。

香芝市は奈良県中西部に位置する市、一九九一年（平成三年）十月一日に北葛城郡香芝町が市制施行し、香芝市となった。そもそも「香芝」は鹿島神社（下田西）に由来するとされる。鹿島神社は茨城県鹿嶋市の鹿島神宮

を総本社とする。この鹿島神宮周辺からは五世紀の祭祀で使われたとされる遺物が出土している。國學院大學の「鹿島神宮に現れた遺跡そこから見えた古代のフロンティア」HPには「鹿島神宮周辺出土の子持ち勾玉はヤマトの中心地で出土したタイプに類似している。五世紀に行われた鹿島神宮の祭祀は、当時の中央であるヤマトの影響下だった可能性が高い。」と書かれている。下布田出土・12 cmの子持ち勾玉はヤマト王権で見られるタイプに非常に類似している。

### 三、勾玉と子持ち勾玉

大田区立郷土博物館の大勾玉展図録の勾玉の説明を引用すると。

勾玉の起源は胎児の形や魂の姿を象ったとする説、巴形、陰陽、月、北斗七星の形を模したとする説などがあるが根拠に乏しいと言われている。最も有力視されるのは牙玉起源説である。牙玉は陸上動物や海獣の歯牙に穴をあけた垂飾品で、世界でも類例が確認されている。縄文時代早期から確認され、後・晩期まで一般的な装身具として知られている。縄文時代後・晩期には「地域ブランド」とでもいえる素材や形状にまとまりのあるグループが出現し、流通量も増加する。

「勾玉」という言葉は、奈良時代に編纂された『古事

「記」や『日本書紀』に登場する。最古の文献史料の記録は、それより数百年前『魏志倭人伝』の『青大句珠』に遡ると考えられている。正始八（二四七）年あるいは九年、邪馬台国の女王壺与が、中国の晋に使節を送った際、様々な特産品を献上し、その中の一つに「青大句珠二枚」という言葉がある。これはヒスイ製の勾玉と推定される。古墳時代の前期（三世紀中頃）に中国（晋）への貢物として勾玉が献上されたことは、勾玉が倭国を象徴する物であったことを示唆している。勾玉の中に子持ち勾玉と呼ばれる一群がある。通常の勾玉よりかなり大きく作られ、本体の腹部、両側面、背部にそれぞれ小さな勾玉が付けられた形状である。このような複雑な形状は、軟質の滑石を素材とすることで可能になった。子持ち勾玉は、古墳時代中期前半に出現し古墳時代終末期まで製作が継続する。また、子持ち勾玉には様々な形状があり、地域性が認められるが、時期的な変化との区別が充分には進んでおらず、何よりも、この特異な形状の意味が明らかにされておらず、大きな謎を残している。

#### 四、香芝市の子持ち勾玉と下布田古墳

香芝市の子持ち勾玉は大王級の古墳の造墓に関与した土師氏の拠点とされる大阪府藤井寺市の土師の里遺跡出土品と同型式であることから、同じ工人によって製作さ

れた可能性がある。古代豪族だった土師氏は土木系の技術を氏業とし、出雲国、吉備国、河内国、大和国の四世紀末から六世紀前期までの約一五〇年間におよぶ古墳時代に古墳造営や葬送儀礼に関わった氏族である。天穗日命の後裔と伝わる野見宿禰が殉死者の代用品である埴輪を發明し、第十一代天皇である垂仁天皇から「土師職」と土師臣姓を賜ったと日本書紀にある。本貫は下総国にもあることから鹿島神宮周辺の祭祀遺跡も関わったと思われる。東国の祭祀遺跡はヤマト王権の置かれた奈良、伊勢、房総、鹿島、福島各地点を結ぶと古事記におけるヤマトタケルの東征ルートとほぼ一致する。鹿島神宮、香取神宮は東国開拓の最前線であり、ヤマト王権が重要だと考え祭祀が発展したと思われる。下布田古墳の位置を全国文化財総覧で調べると山武市下布田大作（現況）畑。下布田古墳群は東金市上布田後四一八下田四一一三。（現況）畑。（奈良文化財研究所）下布田出土12cmの子持ち勾玉の隣接の土地は戦前、高さ5mほどの墳墓がいくつかあり字は名代。また隣接する日吉神社周辺は字・宮代である。現在は畑地である。名代は子代と並んで、古墳時代の部民制における集団の一つである。一定の役割をもってヤマト王権に奉仕することを義務づけられた大王直属の集団である。

下布田古墳の前の森台には森台遺跡があり、北野五号墳からは四世紀前期から中期・小型の青銅製の鏡や紺色のガラス小玉の美しい装飾品が出土している。坂東はヤマト王権から総国として把握されていた。総国は安房国・上総国・下総国のみならず、相模国と武蔵国の地域をも含んでいたとされる。相模国と武蔵国も調物は布（麻）が中心であり調布や麻布などの地名も残る。総国の開拓には忌部氏の東遷説話が知られている。調布市には下布田古墳群があり、狐塚古墳は都内でも最大規模の円墳である。

東京都大田区立郷土博物館の特別展大勾玉展図録 令和四（二〇二二）年十一月二八日 には「関東地方における古墳時代前期のヒスイ製勾玉の主な出土分布」に山武市の森台遺跡の北野五号墳と麻生新田の島戸境一号墳が掲載されている。ヒスイ製勾玉は倭国を象徴する貴重なものである。子持ち勾玉が発見された下布田古墳に近い場所である。古代、東上総に属する山武市には、ヤマトタケル伝承が多くある。森台遺跡、山武市と調布市の布田も忌部氏と関わりがあると思われるが、土師氏の関わりも考えられる。いずれにしてもヤマト王権と近い関係の力のある豪族が治めていた土地ではないかと考えられる。もしかしたら豪族居館などがあった可能性がある。

12 cmの子持ち勾玉が山武市に残されていたら古墳時代の祭祀などを研究する上で極めて貴重な資料になったと思われる。

（参考文献）

- ・会誌「郷土八街」臨時号 山武の旧家を追う ―地方史に一つの光明
- ・「鹿島神宮に現れた遺跡そこから見えた古代のフロンティア」國學院大學
- ・「特別展大勾玉展図録」大田区立郷土博物館
- ・「千葉県山武町森台古墳群の調査」青山学院大学